

## ジャック・ロゲIOC会長への名誉博士称号授与

真田 久(筑波大学人間総合科学研究科)

嵯峨 寿(筑波大学人間総合科学研究科)

### Awarding of the Doctor Honoris Causa to Jacques Rogge, President of the IOC

#### 1. ロゲ会長への名誉博士称号授与の趣旨

平成18年10月20日、筑波大学はジャック・ロゲ国際オリンピック委員会(IOC)会長に筑波大学名誉博士称号の学位記を授与した。その経緯と趣旨について本稿で示しておきたい。

ジャック・ロゲ(Count Jacques Rogge) IOC会長は、オリンピック・ムーブメントを推進する国際オリンピック委員会の会長(2001年～)として、オリンピック競技会の改革に着手し、人類にとってより適切な規模のオリンピック競技会の開催と、ドーピング問題の撲滅に積極的に取り組みながら、平和の祭典としてのオリンピック理念の普及に尽くされてきた。

また、筑波大学で行われた五輪講座「オリンピックの望郷」(平成15年度総合科目)の授業において、学生たちにメッセージを寄せて下さり、その後も同五輪講座を継続的に支援して下さいました。

ジャック・ロゲ会長は、オリンピック・ムーブメントの改革と発展に積極的であること、筑波大学の学生に対して、オリンピックへの幅広い学問的関心の向上に貢献されたこと、および筑波大学の研究者にオリンピック研究の重要性とその意義を提供されたこと、などに際し、筑波大学名誉博士の学位を授与することが決定された。

筑波大学の前身、東京高等師範学校の校長であった嘉納治五郎が、1909年にアジアで最初のIOC委員に就任したことにより、日本のオリンピック・ムーブメントは歩みを開始した。したがって2年後の2009年に百周年を迎えることになる。東京高等師範学校や東京教育大学、そして筑波大学からは多くのオリンピック選手や役員を輩出し、そして近年始められた大学での五輪講座など、日本のオリンピック・ムーブメントの発展に貢献

してきた。このような折にIOC会長を招いて、名誉博士称号を授与したことは、今後もオリンピック・ムーブメント振興のための研究と教育において、筑波大学がさらに発展していくことを世に公表したこととも言え、その責務は大きいであろう。

#### 2. ジャック・ロゲIOC会長 記念講演要旨

The Olympic Movement and the Role of the Academy.

— Awarding of the Doctor Honoris Causa by  
the University of Tsukuba —

I am very pleased and honoured to receive the title of Doctor Honoris Causa from the University of Tsukuba. I am proud to accept this honour, on behalf of the Olympic Movement, from this institution which defends and promotes physical education and sporting values and traditions.

As you all know, it was at a prestigious university like yours, the Sorbonne in Paris, that the IOC was founded in 1894 by an educator, Baron Pierre de Coubertin. When he decided to revive the spirit of the Olympic

Games of Ancient Greece, Coubertin and his peers strove to use sport to teach the youth of the world basic human values that would enable them to lead better lives and build better communities.

One of these peers was Jigoro Kano, the founder of Kodokan Judo, an educator like Coubertin. Jigoro Kano was chosen by Coubertin himself as the first IOC member for Japan.

For 30 years, he contributed to the Olympic Movement playing a considerable role in the creation of the

Japanese Olympic Committee, collaborating with Coubertin, defending the new idea of Olympism: using sport to advance culture and education, and then to bring the youth of the world together every four years in peaceful competition to celebrate that very dynamic between sport, education and culture.

This century-old philosophy still remains that of the IOC in the 21st century.

Japan has played a major role in Olympism.

It has organised three editions of the Olympic Games: Tokyo in 1964, Sapporo in 1972 and Nagano in 1998. Tokyo has already expressed its interest in hosting the Summer Games in 2016.

Japan has an impressive record of Olympic medals: 123 gold, 116 silver and 130 bronze medals in total. Everyone still remembers the extraordinary performances achieved by Yoshinobu Miyake, Kazuyoshi Funaki, Ryoko Tamura, and Shizuka Arakawa.

I would also like to pay tribute to my IOC colleagues who have contributed in a major way to the promotion of Olympism in their country and within the IOC. Chick Igaya who won the first Japanese Olympic medal in slalom, a silver in Cortina d' Ampezzo in 1956. Shun-Ichiro Okano who, with his team, won the bronze medal in football in Mexico City in 1968.

Through sport, we can teach our young people traditional, humanistic values that are important not only to building their inner character, but also to shaping the communities in which they live.

In today's society, it is more and more obvious that sport has an important place and role in a healthy lifestyle for the wellbeing of the youth of the world. However, we should note that the practice of physical education and sport is declining on school curricula for various reasons in developed countries. One of the most important aspects of this decline is addiction to the screen (TV, video, computer) that leads to inactivity and obesity.

Therefore, increased access to basic physical activity, as well as to high-level training, is essential. It is our duty to defend the values inherent to sport and to remain vigilant to the dangers that threaten it, such as doping. The Olympic Movement has a long history of fighting doping in sport because cheating defeats the very universal values of sport, which include: healthy

behaviour and lifestyle, fair play, respect, discipline, solidarity, personal development and tolerance.

It is the same concern for a University such as that of Tsukuba, which assumes the responsibility of educating today's students, who will be tomorrow's leaders, experts, coaches and educators on whom we all depend. The graduates of this University, like those of other institutions elsewhere, are the backbone of the development of sport and the promotion of its values in Japan and beyond.

Thus, the sports world and the academic world must continue to encourage young people to participate in sport and physical activity in a spirit of fair play, hence contributing to their overall well-being.

The hope is that if young people can learn to respect each other on the field of play, they may transfer this sentiment to other elements of their daily lives.

On behalf of the Olympic Movement, may I express once again my deep gratitude for being honoured with such a prestigious distinction.

Thank you for your attention.

### 3. 筑波大学長挨拶

本日、筑波大学に国際オリンピック委員会会長ジャック・ロゲ会長をお招きして、名誉博士称号を贈らせていただきましたことを誇りに思います。また博士が、私どもの申し出を快く引き受けていただきましたことに対して衷心より厚く御礼申し上げます。

筑波大学名誉博士の称号は、これまでノーベル賞受賞者など9人の方に授与してまいりました。今回のロゲ会長への授与が、ちょうど10人目となり、また、体育・スポーツ学の分野では初めてでありますので、本日は記念すべき式典となりました。重ねて、御礼申し上げます。

本学は、従来の制度にとらわれない新しい構想に基づく大学として、1973年10月に創設されました。33年を過ぎたばかりの若い大学ですが、我が国を代表する200余りの研究機関が集積した筑波研究学園都市の発展とともに成長を遂げております。

一方、本学の前身校である東京教育大学や東京高等師範学校が、近代日本における教育の研究と教育者養成を手がけてきたことから数えれば、130年を超える歴史を誇る大学でもあります。ま

た、体育・スポーツ学の研究と指導者養成の面でも、秀でた大学であります。

伝統的な柔術を統合、再編して講道館柔道を創設し、全世界に広めた嘉納治五郎先生は、東京高等師範学校の校長を、25年近く務めました。その間に我が国の教育の充実をはかったのはもちろん、欧米からスポーツを積極的に取り入れ、大学スポーツの発展にも尽くしました。その流れは今日の筑波大学にも引き継がれています。

また、嘉納校長はIOC委員としても30年近く活躍いたしました。ベルギー出身の第三代IOC会長、バイエ・ラツール伯爵と特に親しく、東京やヨーロッパ各地で、オリンピック・ムーブメントについて、何回も会談されております。ラツール会長と嘉納校長は、東洋でオリンピック競技会を開催し、スポーツによる国際親善が青少年に伝わってこそ、オリンピックが世界的な運動になる、との考えで一致され、日本での開催を切望されていきました。

1940年の第12回オリンピック競技会は、日本の政治的な混乱から開催には至りませんでした。1964年に東京で開催されたオリンピックは、日本人の世界平和に貢献する姿を示すことができました。ラツール会長と嘉納の思いは、ほぼ実現されたことと思います。

ラツール会長、嘉納校長の先人の教えを受け継ぎ、私ども筑波大学では、オリンピック・ムーブメントの振興に微力ながらも、尽くして参りました。数多くのオリンピック選手や役員を輩出して参りましたことはもちろん、五輪講座による学生への教育をはじめとしまして、科学研究費補助金を獲得してのオリンピック研究なども継続して行っているところであります。

特に五輪講座の授業におきましては、ロゲ博士から、学生たちにメッセージを頂戴し、それを機

会にいつそう学習意欲を向上させた学生が多数、おります。この五輪講座の内容は新聞等でも2年間にわたり紹介され、多くの読者にオリンピック・ムーブメントの意味を伝えることに、貢献したことと思います。

研究の面におきましても、本学の研究者が、国内や海外の研究者と連携して、さまざまなプロジェクトが進行しているところです。

ロゲ博士は、2001年に国際オリンピック委員会会長に就任されて以来、オリンピック・ムーブメントのさらなる発展のために、さまざまな改革に着手され、実行されていることは、よく知られているところであります。すなわち、オリンピック競技大会の規模の適正化、地球環境への配慮、オリンピック教育の普及、ドーピング問題の撲滅などの面で、大きな成果をあげられています。

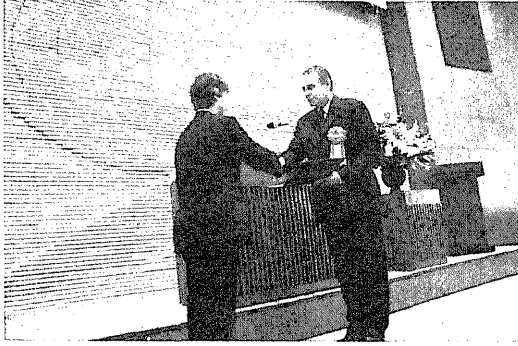
1909年以来、オリンピック・ムーブメントの振興に少なからず貢献して来た私ども筑波大学は、それらのことを評価させていただき、今回の名誉博士称号の授与を決めさせていただきました。今後ともオリンピック・ムーブメントの発展のために、さらなるご活躍を期待いたすところであります。

あわせて、私どもも、大学の立場で、オリンピック・ムーブメント発展のための研究と教育に、さらに精進して参ることを表明したいと思います。

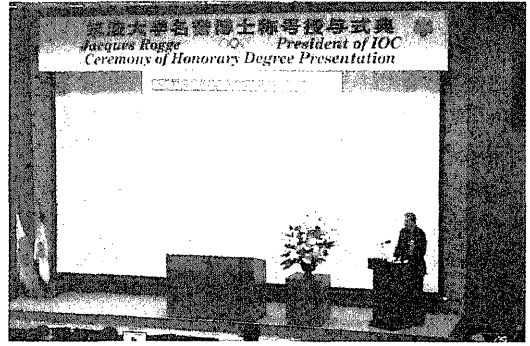
最後に、遠路お運びいただきましたロゲ博士ご夫妻、そして国際オリンピック委員会副会長 猪谷千春様、日本オリンピック委員会会長 竹田恒和様はじめ、多くのご来賓の方々に、重ねて感謝の意を表し、挨拶のことばとさせていただきます。

2006年 10月20日

筑波大学学長 岩崎洋一



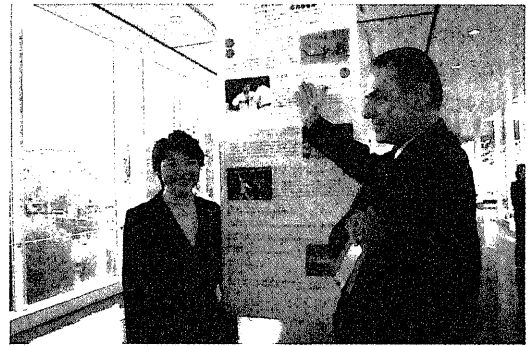
名誉博士称号授与



ロゲ会長記念講演



ロゲ会長夫妻と岩崎学長



オリンピック展示を鑑賞



記念レセプション



記念レセプション